Osaka University Knowledge Archive

Title	外国地名の漢字表記について ： 「アフリカ」を中心に
Author(s)	王, 敏東
Citation	語文. 1992, 58, p. 12-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68840
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

外国地名の漢字表記について

―「アフリカ」を中心に―

王　敏東

0・1

地名の研究は国語学において、残念ながら、あまり進んでいない分野だと言わざるを得ない。近年鏡味明克氏によって研究がなされているが、外国地名については考究が及んでいないようである。

大正十二年に「外国（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ仮名書トスルコト」という臨時国語調査会が発表した「常用漢字表」が出るまでは、外国地名は漢字で表記することが多かった。今でも、名残として「英国」「豪洲」「日米安保条約」など外国地名の漢字表記によって作られた熟語がたくさん残っているし、新聞などにもこういうような漢字表記法がよく出ている。このような外国地名の漢字表記法は簡潔で、造語上、弾力的な機能を持っているし、今でもわれわれの日常生活に浸透している。

外国地名の漢字表記において、日本と中国は相当な関連性を示しているが、時代が移るにつれて、日中両国は各自の方法をとるようになった。中国では文字としては漢字だけしかないので、外国地名を漢字で書き表すことは古くから行われてきた。たとえば、インド、カンボジア[1]など、古くから中国に知られた地名は歴史書などの文献に散見している。明末、西洋宣教師によって新しい世界地理概念が中国に持ち込まれた。特に、利瑪竇（マテオ・リッチ）が漢文で描いた『坤輿萬國全図』（一六〇二年）は地理、地名、文化など、いろいろな意味で中国の世界観に新しい考え方を示し、後世に多大な影響を与えたと思われる。日本は最初は中国の表記をそのまま受け入れたと思われる。しかし、もともと外国語である中国語を日本語として使うことにはどこか不自然な所が生じるのは当然なことである。そのために、中国でつくった外国地名の表記をより原音に近く、また、より日本語に合うようにと、いろいろと工夫して変えることが多い。一方、漢字を表音文字として使っている外国地名の漢字表記法はある意味で万葉仮名の表記法と同じ働きを持っている[2]。洋語と日本語の基本的な性質が違うため、原音を表そうとする時には、冗長な表記になるのは避けられないことであろう。そこで縮約語形や略語の問題が生まれてきたのである。こういう外国地名の漢字表記の研究は、当て字、漢字意識、地理、歴史、更に文化交流などの問題と関係が深く、重要である。にもかかわらず、この方面の

研究は従来あまりなされていないようである。あっても、かなり限定された資料における共時的な研究ばかりであって、中国の表記まで遡って、対比しながら全体的に論じたものは管見の限り見あたらない。今回は外国地名の漢字表記の問題の一つとして、特にアフリカの問題を中心に、通時的に――更に中国の表記まで遡って論じたいと考えている。

0・2、研究方法

日本における外国地名の表記はまず音訳語と意訳語に大別できる。音訳語を再分類すると、その外国地名の中国（または日本）における受容は次の三つの時期に分けることができる。

一、音訳語：

（一）古くから中国（または日本）と交流のあった国の名である。中国（または日本）のまわりにある国、たとえば、インド、朝鮮、東南アジア諸国の類である。この類の地名はよく中国風の「古称」で諸文献に見られる。中国との交流の長さに従って、やや多様な形を示している。

（二）主にマテオ・リッチの紹介によって中国に知られた地名である。たとえば、アフリカ、欧米の地名である。この類の地名はなるべく原音を忠実に再現するため、長い当て字表記が多い。

（三）マテオ・リッチの『坤輿万国全図』（一六〇二年）以後発見された所である。オーストラリアがそれにあたる。中国を経ず、または中国の影響をあまり受けずに、原音が直接日本に入ったものかと思われる。

二、意訳語：「紅海」「地中海」「太平洋」のように意訳した外国地名である。

三、その他：以上の一、二のいずれも属していない、かなり独自の性質を有しているものがある。[3]

本論は紙幅などの関係で、今回はアフリカの漢字表記を中心にとりあげるので、他の地名についてはまた別の機会に述べることにしたい。

具体的な方法としては、全体像を捉えるため、古代から現代に至るまでの日中両国の歴史書、地理書、地図、紀行文、文学作品、教科書、節用集、辞書、百科辞典、新聞など、いろいろなジャンルの文献から用例をあつめ、それらを年代順に配列した上で分析していくことにする（P21付表を参照）。なお、表記の変化経路をより見やすくするために、用例を図にする（P27付図を参照）。調査に用いた資料はP28付録の通りである。

I、アフリカの漢字表記史

昔、アフリカのことを「リビア」と呼んでいた。ヘタカイオスの世界図（前六世紀頃）やヘロドトスの世界図（前五世紀頃）では今のアフリカ大陸を「LIBYA」と称している。それに対して、「アフリカ」という言葉は「ローマ統治下にアフリカは北西部の属州がアフリカと呼ばれ、……のちアフリカという呼び名が全大陸をさすことになった」[4]と言われているように、昔は今のアフリカの北西部あたりを指したと考えられる。一方、大陸名として用いられた「ア

フリカ」は中世のTO図（TO map）[5]によく見られ、一四八二年ウルム版のプトレマイオス世界図や十六世紀の幾つかの地図にも現れた。[6]

一方、中国とアフリカとの実際の接触は明代に遡ることができる。明の時代、鄭和（一三七一～一四三四年）が航海して、アフリカに到着したのはほぼ事実として証明されているわけだが、その鄭和の航海について記す有力な資料『武備志』にはアフリカ全体に対する呼称が見あたらなくて、「木骨都束」や「葛児得風」など、アフリカの地方名が載っているにすぎない。[7]

前述したことと対応するように、「アフリカ」の音に漢字を当てる前に、中国にはすでに「利未亞」という称呼があって、指す内容は今のアフリカである。マテオ・リッチの『坤輿萬國全図』などでは、アフリカを「利未亞」と大文字で記入しているのに対して、アフリカの北西あたりを「小亞非利加」と称している。日本は中国の影響をかなり受けていて、大体「リビア」系からアフリカの当て字表記系に移行している（図参照）。このように、「アフリカ」は、他の欧米地名と違って、アフリカを指す語自体が「リビア」から「アフリカ」に変わったという特異性を持っているわけである。

本論はアフリカの漢字表記につき、「利未亞」系とアフリカの当て字表記系との二つに分けて論じたいと思う。ただし、アフリカの場合は「ア」「フ」「リ」「カ」のその四音節ごとに、それぞれの表記に揺れが見られる。たとえば、「亜」―「阿」、「弗」―「仏」（「佛」）―「払」（「拂」）―「布」―「夫」―「非」―「斐」、「利」―「唎」―「裏」―「里」―「理」、「加」―「駕」―「迦」などのように数種類の表記があるので、その音節ごとにとりあげて考えたいと思う。

1、「リビア」系

昔、アフリカのことを「リビア」と呼んだことは前にも述べた。「リビア」の語源については、「古代ギリシヤ人はリバ（湿気）をもたらす南西風の風上地方としてリビアの名を与えていた（中略）とする説が有力である」と戸井洋氏によって指摘されている。[8]

中国において、マテオ・リッチが一六〇二年につくったと思われる『坤輿萬國全図』ではアフリカ大陸を大文字で「利未亞」と記している。なお、『明史』（意大利亞傳）はリッチ図をもとにして「天下有五大洲、（中略）第三曰利未亞洲、亦百餘國」としている。『三才図会』（一七一五年・王元翰）も「利未亞」という表記を採用している。以上の諸文献から見れば、十七世紀の初めから中国において、アフリカのことを「利未亞」と呼んでいたことはほぼ間違いないと言えるだろう。リッチ図を継承した『職方外記』（一六二三年）と『坤輿図説』（一六七二年）も「利未亞」をそのまま採用した。

一方、日本では『西洋紀聞』（一七一五年・新井白石）でアフリカについて「漢に利未亞と訳せるは即此」と記述しているので、このアフリカに対する「利未亞」という表記がこの頃日本に入ったことが分かる。なお、「未亞」という新しい形さえ日本で現れていた（一七八五年頃・長久保赤水『改正地球萬國全図』）。「利未亞」に「リミヤ」と振り仮名をつけているものには『四十二國人物図説』（一七二〇年）、『嗚蘭新訳地球全図』（一七九六年・橋本宗吉）、『地球万国山海輿地全図説』（一八五〇年・山崎成美）、『蒙古退治万国

早分図』（江戸末期）などがある。これは恐らく「LIBYA」という原音を知らず、中国で作った「利未亜」という漢字表記をとったのであろう。「リビヤ」と読んでいるものには『采覧異言』（一七一三年・新井白石）、『改正地球万国全図』（一七八五年頃・長久保赤水）、『地球山海輿地全図説』（一七八八年・長久保赤水）などがあげられる。また、漢字表記は「利未亜」であっても「アフリカ」という振り仮名がついている例が『地球一覧図』（一七八三年・三橋釣客）、『地球万国山海輿地全図説』（一七八八年・長久保赤水）など多数見られる。

一方、一八〇二年に成立した江戸時代最大の地理書である『訂正増訳采覧異言』（山村昌永）には「亞弗利加洲諸国旧作利未亞」とある。「利未亞」がその時すでに「古い形」として意識されていたのである。なお、表（図）に見られるように、日本において「利未亞」がアフリカ系の当て字表記にとってかわられる時期はおよそ十九世紀の後半頃からである。

2、「アフリカ」系

西洋においては、アフリカのことを言うのに「リビア」という呼称から「アフリカ」という呼称を使うように変わった。中国も日本もそれと同様にアフリカに対する表記が「リビア」系から「アフリカ」系に変化している。

アフリカの当て字表記として、「亞非利加」（一六〇二年『坤輿萬國全図』、一六二三年『職方外紀』）や「亞費利加」（一六七二年『坤輿図説』）があった。いずれも元はアフリカの北西にある地域名であった。後に、アフリカ全体を指すようになったと考えられる。

（1）一音節目の「ア」について

「ア」の部分に当てた漢字として、「亜」と「阿」しか見られない。この「亜」と「阿」の揺れは他の外国地名の「アラビア」や「オーストラリア」などにもあった。しかも大体「亜」から「阿」へ移っている。

発音の面から見ていくと、中国語において「亜」（[ya]）から「阿」（[a]）へ移ったのはより原音に近い形になったものと思われる。日本語では「阿」も「亜」も「ア」で発音するので、「亜」と「阿」のどちらかと言えば、中国の古い形である「亜」の形がうけつがれる傾向がある。この点において日本では古い形の「亜」を継承して、中国では新しく出来た形になっていると言えよう。

（2）二音節目の「フ」について

①「アヒリカ」系

アフリカ大陸を指すわけではないが、中国で最初のアフリカの当て字表記はおそらく一六〇二年の『坤輿萬國全図』にある「亞非利加」であろう。発音の面から考えれば、アフリカの二音節目を「非」で当てたのは中国語的な当て方かと思われる。つまり、唇歯音の[f]を同じ唇歯音の中国語の「非」（[fe]）で当てたのであろう。一方、日本語には相当する唇歯音がない。この「非」系の表記は中国で当てられたばかりでなく、中国ではこの系統の表記が後まで優位を示しているのである。それに対して、日本で、一八六八年『童蒙階梯西洋往来』の「亞非利加州」や、一八六九

年『世界国尽』の「阿非利加洲」、一八七二年『世界都路』の「亞非利加」などの例が出ているのはおそらく中国の影響だと思われる。けれども、十九世紀後半になると「非」系表記がだんだん見られなくなった。

中国でアフリカ大陸全体を指す場合の「非」系表記は十七世紀前期にはすでに現れた。しかし、光緒二十六（一九〇〇）年の『萬國通史』の前・続・三編というシリーズの本には「うつくしいさま」の意を持ち、「非」とアクセントが異なる「斐」系表記が用いられている。この「斐」系表記はもう一例、中華民国十六（一九二七）年の『清史稿』にも見られる。「非」系表記が定着していたと思われる時期になってなぜ「斐」系表記が出現したのかは分からない。なお、『萬國通史』も『清史稿』も「斐」「非」の二表記を混用している。また、「斐」系表記は日本の文献には見あたらない。

日本では「非」系表記が十九世紀後半まで使われていた。ところで、「非」系表記の読み方はどうなっているだろうか。まず、「アブリカ」と振り仮名をつけている例が『銅版絵入萬國往来』（一八七一年）や『萬國新商売往来』（一八七二年）にあり、また、「アビリカ」と振り仮名をつけている例が『開化節用集』（一八七五年・宇喜田小十郎）に見られる。しかし、「アフリカ」と振り仮名を付けているものが圧倒的に多い。たとえば、一八七三年の『書頭小傳西洋開化往来』や一八七四年の『萬國地誌略』、一八七八年の『翻刻萬國通史』、一八九〇年の『広益節用集』などである。

② 「アフリカ」系

「アフリカ」系の表記は日本では多くの用例があるが、中国では現在までのところ用例をみつけることができない。日本では「フ」に当たる部分は漢字の「弗」「仏」（「佛」）「払」（「拂」）「布」「夫」が当てられている。特に「亜弗利加」という表記は十八世紀の後半『フッイセル改訂ブラウ世界図古写』にすでに見られ、以後、外の諸表記より圧倒的に多く用いられている。十九世紀の後半に、一度「亜非利加」の勢力が入ってきたが、この中国色の強い「非」系表記は日本人の意識にそわなかったようで、後に使われなくなった。

「非」系のものは前節にも述べたように、中国語訳としてはふさわしい表記であるが、「非」が日本語において「ヒ」としか発音できないので日本の言語に適した「弗」系表記が用いられることになる。その「フ」系表記の中に、「弗」「仏」（「佛」）「払」（「拂」）「布」「夫」の五種類があった。

「弗」は慣用的に「フ」と発音することがある。だから、これをアフリカの二音節目に当てることは可能であろう。「仏」（「佛」）と「払」（「拂」）は「弗」に通ずるので[9]、「弗」と同様に用いられている。やや複雑な字形である「仏」（「佛」）「払」（「拂」）よりは「弗」の方が多く使われている。

「夫」は、『異人恐怖伝』（一八〇一年・検夫爾著）と『窮理通』（一八三六年・帆足萬里）の二例しか見られず、「布」は、一八五二年に訳された『理学提要』に「亞布利迦」があるだけで、アフリカの漢字表記においてあまり用いられていない。

中国では「非」が主として用いられているのに対し、日本では「弗」が主として用いられていることになる。

（3）三音節目の「リ」について

「リ」の音を当てた漢字は「利」「唎」「裏」「里」と「理」があった。この五字がお互いに交替する例は「アメリカ」や「イギリス」、「イタリア」、「オーストラリア」などの「リ」の部分にも見られる。五字とも同音であるが、より複雑な「裏」、「理」と「唎」はあまり用いられていない。これらの「リ」の表記の中では「利」が多く用いられている。

（4）四音節目の「カ」について

外国地名において、「カ」の音を示すために、もっとも多く使われるのは「加」である。アフリカでも「加」の字が多用されている。だが、「加」以外に「駕」（一九〇〇年『萬國通史続編』の「阿斐利駕」）や「迦」（一八五二年『理学提要』の「亞布利迦」）を使った例もあった。「加」「迦」「駕」の混用は「アメリカ」と「マラッカ」の「カ」の場合にも起こった。しかしながら、書きにくい「駕」と「迦」の方は当て字として向いていないかと思われ、淘汰されることになったのであろう。

3、アフリカの略称について

中国語においては二音節の語が一番安定している。だから、長い単語を略称する場合にも、二音節の形式になりやすい傾向があるという。[10] アフリカを略した形として、中国語でも、日本語でも、一音節目の「阿」に「洲」をつけて「阿洲」が用いられることがある。しかし、「ア」で始まる大陸名には、アフリカの他に、アジアとアメリカがある。そこで、同音の「ア洲」を避けるために、二音節目に「洲」を付けるという語構成の略称が考えられる。中国では「非洲」と「斐洲」が用いられたが、筆画数の多い「斐」は用いられないようになり、今は「非洲」しか用いられていない。

4、アフリカの漢字表記についてのまとめ

全体としては中国でも日本でも「リビア」系の表記からアフリカの当て字表記に移っている。しかし、「利未亜」と表記しているのに、「アフリカ」の振り仮名がついている例から見れば、「利未亜」からいきなり一転して「アフリカ」になったわけではないことが分かる。アフリカの当て字表記では、「ア」「フ」「リ」「カ」の音節ごとに、それぞれ漢字表記に揺れが生じている。

「ア」の部分は、中国では「亜」からより原音に近い「阿」に変化して来るが、日本では「亜」のままである。

特に、注目に値するかと思われる部分は二音節目である。中国では中国語に合う「亜非利加」があって、今でも使っている。この「亜非利加」を代表とする「非」系表記が日本にも伝わったと思われる。しかし、読み方としては「アフリカ」と振り仮名をつけてあるものが多い。「フ」に「非」で当てたのは不自然であって日本語に合わないので、ますます使用されなくなり、その代わりに「亜弗利加」等の「弗」系表記が日本で生まれ次第に優勢になってきたと思われる。ここに外国地名の漢字表記はより原音に近づくという原則が見られる。原音を再現するため、なるべく原音にあった漢字を

選ばなければならない。それは中国において「ヒ」系表記が不動の地位を占めた理由でもあるし、日本においてより原音に近い「フ」（弗）系表記が出現年代の早い「ヒ」（非）系表記にとってかわった理由でもあろう。

三音節目の「リ」は「利」で当てられたものが多い。

四音節目の「カ」は「加」を多用している。

結び

以上のようなアフリカの漢字表記の消長から見れば、外国地名の当て字表記の幾つかの原則が窺えるように思われる。また、私がこれまでに調査した他の外国地名の表記をも勘案すると、別の傾向も浮かび上がってくる。そこで、外国地名の当て字表記の原則について、アフリカ以外の表記をも含めて、現在の所考えていることをまとめることによって、結びとしたい。

第一に、音訳語の場合、できるだけその地名の原音に忠実に当てるため、原語の発音により近い音の漢字がまず使われる。中国にせよ、日本にせよ、これはどの外国地名の当て字表記にも当てはまる一番の原則である。しかし、漢字の読み方は日中各々違う。日本では中国で作られた表記を受け継いで、日本語で発音した時、原語に合う場合と合わない場合がある。前者の場合は、「インド」とか「イタリア」のように、中国の表記を日本でそのまま採用しており、あまり問題はない。後者の場合は、日本は中国の表記を何らかの形で変えており、より日本語らしい表記を作る工夫がなされている。たとえば、今回とりあげた「アフリカ」を例として言うと、二音節目の「フ」について、中国では「非」を当てたのは自然で、日本では最初にこの「非」系表記をそのまま受け継いだが、その後日本語によりふさわしい「弗」を当てるようになった。

一旦、音が決まれば、同音異字の中からどれを選ぶかという問題が起こってくる。そこで、同音異字語の中から、

1、筆画数の多少

2、その漢字の持つ意味

などによって、字が選ばれるという第二の原則がはたらくと思われる。

「筆画数の多少」については、多くなる場合と少なくなる場合という二つの方向が考えられる。アフリカは「払」（「拂」）「仏」（「佛」）より「弗」が優勢になっていくが、これは筆画数が少なくなる例である。また、ヨーロッパは「歐邏巴」から「歐羅巴」へ、アメリカは「亞墨利加」から「亞米利加」へ変化していったのも同様の例であると考えられる。[11] これらの場合は、書きやすい漢字が優先されたようである。一方、イギリスを「英吉利」という表記があるにもかかわらず、筆画が比較的複雑な「咲咭唎」で当てている場合があるのは、筆画数が多い方を選ぶ例である。これは「英」「吉」「利」などのよく使われる漢字を使うと、普通の文と誤解される恐れが大きいが、「咲」「咭」「唎」のようなあまり使われない漢字を使うと、「外国地名」だと読者に理解されやすいと考えられたからであろう。

「漢字の持つ意味」については、今回とりあげたアフリカの場合はそれほど目立って反映しているわけではないが、外国地名の漢字表記において見逃せないポイントだと考えられるので、ここに書き

加えておく。たとえば、佐伯哲夫氏が「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」[12]において「好字の表記へ」変化するという結論を出しておられる。私が調査した江戸時代以前においても、インドの当て字である「身毒」が使われなくなる現象などが見られたが、このような例は佐伯氏の調査された維新前後の結果とも合致する。しかし、西洋のものを排除しようとした鎖国時代にフランスをわざと「払狼機」であてたり、キリシタンを「切死丹」に当てたりすることもあった。つまり江戸時代以前においては、当時の日本の対外姿勢をも反映して、必ずしも「好字の表記へ」変化するとは限らないのである。それから、特に良い意味をもっているとも悪い意味をもっているとも決しがたい同音異字の場合は他の要素によって取捨が行われる。たとえば、中国でオーストラリアを表記するとき、「奥」「墺」より三水のついた「澳」が優勢であったのは、中国ではオーストラリアを海外にある大きな島だと認識し、水と結び付けやすかったからであろう。要するに、音訳語であっても、意味の面をも併せて顧慮する必要がある。

このように、外国地名の当て字表記はまずなるべく原音に近い漢字を使うという原則が見られ、同音異字の場合は、「筆画数の多少」と「漢字の持つ意味」という副次的な要因も関係すると考えられる。

全体的に言うと、外国地名の漢字表記において、日本は中国の影響を相当に受けていると言える。中国で作った表記はほとんど全部そのまま日本に入った。しかし、日本は中国で作ったそれらの外国地名の漢字表記をそのまま採用したわけではなくて、むしろ中国の表記をふるいにかけて、日本に適する表記を受け入れ、そうでない場合は日本独自の表記に変えてきたのである。そして、中国で作った外国地名の表記が日本で通用しない最大の要因はやはり両言語の音韻体系が違うことに求めることができると思われるのである。

本論文は地名の漢字表記を研究していく方法を探る一つの試みとして「アフリカ」について論述してきた。しかし、調査や説明など、不十分な部分があるものと思う。別の地名についても詳しく調べれば、ここで述べたようなことに修正を加える必要も出てくるかと思う。しかし、それらは今後の課題としたい。

注

(1) インドは古く「身毒」(『史記』、『倭漢三才図会』など)「天竺」(『後漢書』『正倉院文書』天平勝宝八年六月二一日・東大寺献物帳など)というふうに表記されたことがある。カンボジアには「東埔寨」(『東西洋考』、『海國図誌』)などの表記が当てられた。

(2) アフリカに「亜弗利加」、チリに「智利」、ロシアに「魯西亜」を当てた場合は、万葉仮名の音仮名と同じ働きを持っている。又、アラビアに「荒火屋」を当てた例(福沢諭吉『世界國尽』)も見られるが、「アラ」の部分に「荒」を当てたのは訓仮名の機能に相当すると考えられよう。

(3) 地中海や太平洋の類の海洋の呼称は意訳したものが多い。しかし、音訳語として現在広く使われている海洋名にカスピ海があった。カスピ海は昔長い間「北高海」或は「裏海」と呼ばれていた。「北高海」と「裏海」という呼称は音訳語でもないし、意訳語でもないので、「一、音訳語」にも「二、意訳語」にも分類できない。外国地名において、カスピ海の表記変化がかなり特別なので、「三、その他」という項目を立てて扱うことにする。

(4) 『世界大百科辞典』(一九七二年・平凡社)

(5) OとTの文字を組み合せた形態の図式で、中世の人々の世界に対する観念を象徴的に表したものと言える。

(6) 織田武雄『地図の歴史』(昭和四十八年・講談社)

(7) 徐玉虎『明代鄭和航海図之研究』(一九七六年・台湾学生書局)などが詳しい。

(9)『説文通訓定声』に「弗假借為佛」また「弗假借為拂」とある。
(10) 趙元任『中國話的文法』(一九八〇年)、黄宣範『漢語語法』(一九八三年)
(11) 春山行夫「現代用語の系統—とくに明治用語について—2」(『言語生活』昭和四十一年)
(12)『神戸大学国語年誌』(一九八六年)

≪主な参考文献≫

〈日本語〉

飯塚浩二「アフリカという地名について」、一九六二年(『地理』第七巻、第八号)
春山行夫「近代用語の系統—とくに明治用語について—1~15」、昭和四十一(一九六六)年~昭和四十二年(『言語生活』)
西浦英之「近世に於ける外国地名称呼について」、昭和四十五(一九七〇)年(『皇学館大学紀要』八)
南波松太郎等編『日本の古地図』、一九七〇年、創元社
河部利夫(責任)編『世界地名辞典—西洋編』、一九七〇年(十七版)、東京堂
西浦英之「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国名称呼・表記について」、昭和四十六(一九七一)年(『皇学館大学紀要』九)
『世界大百科辞典』、一九七二年、平凡社
渡辺光等編『世界地名大事典』、昭和四十八(一九七三)年、朝倉書店
『世界地理百科大事典』、一九七三年、講談社
岩田豊樹『古地図の知識一〇〇』、昭和五十二(一九七七)年、新人物往来社
『図録西洋との出会い』、一九七七年、京都外国語大学付属図書館
『鎖国時代日本人の海外知識』、昭和五十三(一九七八)年、原書房
『宛字外来語辞典』、一九七九年、柏書房
小林雅宏「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」、一九八二年、(『専修大学文研論集』八)
佐伯哲夫「維新前後の新聞に見る外国地名の漢字表記」、一九八六年、(『神戸大学国語年誌』)
佐伯哲夫「官板バタビヤ新聞における外国地名表記」、一九七六年、(『関西大学文学論集』)
織田武雄『地図の歴史』、一九八九年(第八刷)、講談社
秋岡武次郎『世界地図作成史』、昭和六十三(一九八八)年、河出書房発行
『秋岡古地図コレクション名品展』、一九八九年、神戸市立博物館

〈中国語〉

『外国地名訳名』、民国四十四(一九五五)年、教育部公布
徐玉虎『明代鄭和航海図之研究』、一九七六年、台湾学生書局
『世界地名詞典』、一九八一年、上海辞書出版社
邵献图等編『外国地名語源詞典』、一九八四年(第二刷)、上海辞書出版社

—本学大学院博士後期課程—

表：アフリカの用例一覧表

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞弗利加	1789	gi
アフリカ	1792	11
亜弗利加〈アフリカ〉	1794	57
亜弗利加〈アフリカ〉	1794	58
亞弗利加	1796	59
亜弗利加〈アフリカ〉	1796	59
利未亜〈リミヤ〉	1796	59
亜弗利加	1797	53
亞夫利加洲〈アフリカ〉	1801	RA
利未亜	1802	50
亞弗利加	1802	60
利未亞	1802	ヒ
亞弗利加(旧作利未亞)〈アフリカ〉	1802	ヒ
亞弗利加洲〈アフリカ〉	1802	ヒ
アフリカ	1802	ヒ
(此洲一名) 利未亞	1802	ヒ
亞夫利加洲	1802	YI
亜弗利加洲〈アフリカ〉	1806	16
亞弗利加	1810	14
あび里か	1811	MI
利未亞	1822	51
亞弗利加〈アフリカ〉	1829	105
亜弗利加	1836	82
亞弗利加〈アフリカ〉	1836	82

表記〈振り仮名〉	年代	書名
利未亞	1602	一
利未亞	1609	六十三
利未亞	1623	八
亞非利加	1623	八
あひりか	1652	42
利未亞	1672	二十三
利未亞州	1672	二十三
亞非利加	1672	二十三
あひりか	1704以後	SU
利未亞	1709	カ
利未亞〈リビヤ〉	1713	ア
利未亞	1713	ス
利未亜〈リウイヤア〉	1715	イ
利未亞洲〈リミヤ〉	1720	ga
利未亞州	1725	五十一
利未亜〈リミ？ヤ〉	1728	108
利未亞〈あふりか？〉	1744	109
亜弗利加	1774	bi
亜払利加	1774	bi
亞弗利加	1775	52
利未亞〈アフリカ〉	1783	48
未亞	1785	9
利未亞〈リビヤ〉	1785	9
利未亞〈アフリカ〉	1788	49
利未亞〈リビヤ〉	1788	49
利未亜	1789	112

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞布利加洲〈あふりかしう〉	1849	NU
亞弗利加	1850	84
利未亞	1850	87
利未亞〈リミヤ〉	1850	87
リミヤ	1850	87
亜弗利迦〈あぶりか〉	1850	ZA
亞弗利加	1851	68
亞弗利加〈アフリカ〉	1851	70
亞弗利加	1852	69
亞弗利加	1852	71
亞弗利加	1852	72
亞布利迦〈アフリカ〉	1852	bu
亞弗利加〈アフリカ〉	1852	bu
亞弗利加洲	1854	フ
亞弗利加	1854	へ
阿非裏加	1854	五十三
阿非利加	1854	五十三
阿非唎加	1854	五十三
亞非唎加	1854	五十三
亜弗利加洲	1854	WA
亞弗利加	1855	75
亞弗利加	1855	bo
亞弗利加（洲）	1855	bo
アフリカ	1855	bo
亞弗里加州	1856	96
亞弗利加	1856	96
亞非利加洲	1856	五十四
阿非利加	1856	五十四
亞非利加	1856	五十四
亜弗利加洲	1857	サ

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞夫利加洲〈アフリカ〉	1836	RI
利未亞	1836	RI
亜弗利加〈あふりか〉	1838	pu
亜弗利加（洲）〈あふりか〉	1838	pe
阿未利加洲	1839	五十二
阿利未加洲	1839	五十二
阿非里加洲	1839	五十二
亜弗利加〈アフリカ〉	1839	MA
亜弗利加〈あふりか〉	1839	MA
亜弗利加〈あふりか〉	1839	YA
阿未里加洲	1839	五十二
阿非里加洲	1839	五十二
亜弗利加（州）〈あふりか〉	1842	po
亞弗利加	1845	107
亜弗利加	1846	15
亞弗利加	1847	66
利未亞〈リヒヤ〉	1847	85
利未亞	1847	二十六
利未亞洲	1847	二十六
亞弗利加洲〈アフリカ〉	1847	66
阿非利加	1848	十
亞弗利加〈アフリカ〉	1849	118
亞弗利加〈アフリカ〉	1849	zu
亞弗利加〈アフリカ〉	1849	NU

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞非利加洲	1870	チ
亞弗利加洲	1870	チ
亞弗利加	1870	チ
亞弗理加〈アフリカ〉	1870	チ五
亞非利加	1871	tya
亞非利加〈アブリカ〉	1871	tya
亜非理加〈アブリカ〉	1871	tya
亞非利加	1872	ク
阿非利加洲	1872	コ
亞非理加洲	1872	コ
阿非利加	1872	コ
あぷりか	1872	コ
阿非理加洲	1872	コ
阿非理加	1872	コ
亞非利加（人）	1872	コ
亜非利加洲〈アブリカシウ〉	1872	tyu
亜非利加洲〈あぶりかしう〉	1872	tyu
亜弗利加	1873	オ
亜弗利加洲	1873	オ
亞弗利加	1873	オ
亞非利加洲	1873	キ
阿非利加〈アフリカ〉	1873	pyo
亞非利加	1874	テ
阿非利加	1874	テ
亞非利加〈アフリカ〉	1874	テ
亜非利加	1874	ナ
亜非利加〈アフリカ〉	1874	ba

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞弗利加	1858	76
亞弗利加（人）	1860	pa
阿弗利加〈アフリカ〉	1860	chi
アフリカ	1860	chi
阿弗利加	1860	chi
利未亞〈リビア〉	1861	KU
阿非利加〈アフリカ〉	1861	KU
亞非利加〈アフリカ〉	1861	KU
阿非利加(一作利未亞)	1861	KU
亞非利加〈アフリカ〉	1861・8・31	R
亞弗利加	1863	124
利未亜〈リミヤ〉	1863	che
亞弗利加	1864	119
亜弗利加州	1864	119
亞非利加	1864	二十七
阿非利加	1864	二十七
アフリカ	1867	83
亞弗利加〈あふりか〉	1868	95
亞非利加州	1868	ウ
亞弗利加州	1868	ウ
アフリカ洲	1868	pyu
亞弗利加	1868・9・9	A
阿非利加洲	1869	タ
亞弗利加	1869・8・上旬	A
亜非理加洲	1870	チ
亜非利加洲	1870	チ
亞非利加	1870	チ

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞非利加洲	1879	エ
亞弗利加洲	1882	ト
亜非利加	1882	myo
阿弗利加	1884	C
亞非利加	1884	syu
亞弗利加	1884	syu
亞弗利加	1887	7
亞非利加 (Africa)	1887	ホ
亞弗利加 (Africa)	1887	ホ
亞佛利加	1887	ホ
アフリカ［亞非利加］	1887	せ
阿洲	1887	二十八
阿非利加洲	1887	二十八
亞弗利加	1887	E
亞非利加	1887	E
阿非利加	1887	四十三
アフリカ	1888	F
亞弗利加	1888	F
アフリカ	1888	rya
亞弗利加人 (按、黒奴の義)	1888	HI
アフリカ	1888	HI
(赤道)亞弗利加	1888	HI
阿非里嘎	1890	三十
亜非利加洲 〈アフリカシウ〉	1890	ryu
亞非利加	1890	四十八
亜非利加洲 〈アフリカシウ〉	1890	SI
阿非利加洲 〈アフリカシウ〉	1890	SI
阿非利加 〈アフリカ〉	1890	SI
(西)アフリカ	1890	SI

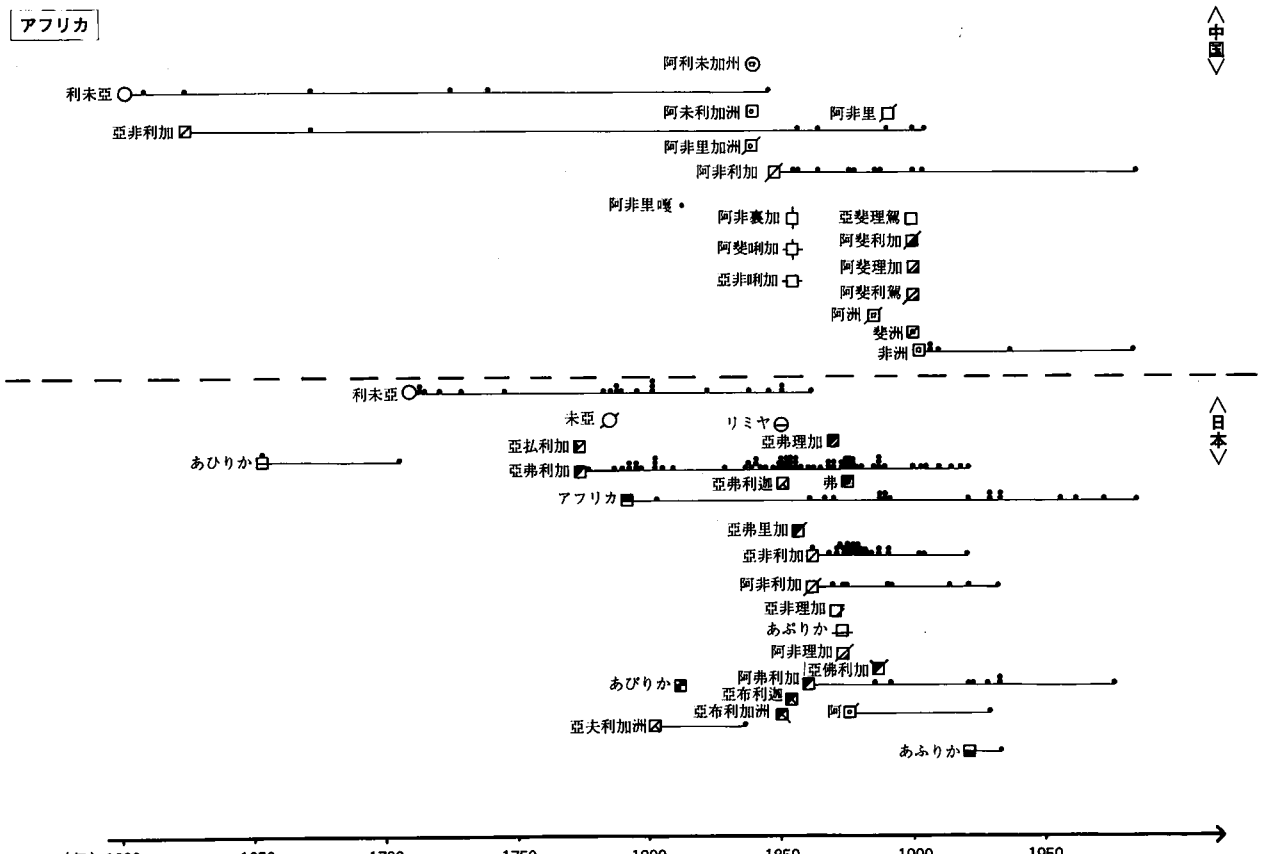
表記〈振り仮名〉	年代	書名
亞非利加 〈アフリカ〉	1874	hyo
亞非利加洲 〈アフリカシウ〉	1874	hyo
亜非利加 〈アブリカ(～アラズ～)〉	1874	NI
亞弗利加	1875	ツ
亜非利加 〈あびりか？〉	1875	ZI
亞弗利加	1875以降	NA
亞弗利加 〈アフリカ〉	1876	ヌ
亜非利加洲 〈アフリカシウ〉	1876	ヌ
亞弗利加	1876	ネ
亞弗利加 〈アフリカ〉	1876	ネ
亜弗利加 〈アフリカ〉	1876	KA 二
弗	1876	KA 二
亞弗利加洲 〈アフリカ〉	1876	KA 二
阿	1876	TI
阿非利加洲 〈アフリカシウ〉	1876	TI
阿弗利加 〈アフリカ〉	1876	TI
アフリカ	1876	TI
阿非利加	1876以後	五十
亞非利加	1878	8
亞弗利加	1878	り
阿非利加	1878	二十九
亜非利加 〈アフリカ〉	1878	gu
亜非利加	1878	gu
亞非利加	1879	エ

表記〈振り仮名〉	年代	書名
あふりか	1921	nyo
(亞非利加・亞弗利加)		
阿弗利加	1922	6
亞非利加洲	1927	七十
(南) 斐洲	1927	七十
阿弗利加	1928	ハ
アフリカ大陸	1928	ハ
阿弗利加洲	1928	ハ
阿	1928	ハ
アフリカ	1928	nyu
アフリカ	1932	hyu
アフリカ	1934	syo
阿弗利加	1934	syo
アフリカシュー	1934	nya
(阿弗利加洲・		
阿非利加)		
(あふりかしう)		
(欧美) 非 (三洲)	1937	六十八
非洲	1937	六十八
非洲	1955	九
阿非利加洲	1955	九
アフリカ	1955	zya
アフリカ	1961	zyu
阿弗利加	1969	KI
〈アフリカ〉		
アフリカ	1972	hya
非洲	1983	二十五
阿非利加洲	1983	二十五
非洲 (阿非利加洲)	1983	二十五
アフリカ	1984	zyo
利未亞	江戸初期	31
利未亞	江戸末期	81
利未亞	江戸末期	81
〈りひあ〉		
利未亞	江戸末期	86

表記〈振り仮名〉	年代	書名
阿弗利加	1892	G
阿非利加	1892	G
亞弗利加	1892・1	I
亞弗利加	1897・2	I
亞弗利加	1899	mu
亞弗利加	1899	C
阿非利加洲	1900	二十四
阿斐利加洲	1900	二十四
斐洲	1900	二十四
斐	1900	二十四
阿斐理加	1900	三十一
亞非利加	1900	三十一
阿斐利駕洲	1900	三十一
亞斐理駕洲	1900	三十二
非洲	1902	二十
阿非利加	1902	二十二
亞弗利加	1903	レ
亜非利加洲	1903	ryo
〈アフリカシウ〉		
非洲	1904	十五
非洲	1904	三十三
亜非利加	1904	三十三
亞弗利加	1904	D
阿弗利加	1904	D
亞非利加	1908	myu
〈あふりか〉		
アフリカ	1908	myu
非洲	1909	二十一
亞弗利加	1909	kyo
〈 Afurika 〉		
阿非利加 (大陸)	1913	ま
阿弗利加	1914	123
亞弗利加	1914	122
阿弗利加	1919	3
亞弗利加	1919	4

表記〈振り仮名〉	年代	書名
亜弗利加 〈アフリカ〉	江戸末期	86
利未亜 〈リミア？〉	江戸末期	89
利未亞州	江戸末期	89
利未亞 〈リミヤ〉	江戸末期	89
利未亞	江戸末期	90
亞弗利加	江戸末期	91
亞弗利加洲 〈アフリカシウ〉	江戸末期	91
亜弗利加 〈あふりか〉	江戸末期	92
亞弗利加	江戸末期	93
利未亞	江戸末期	88
亞弗利加州 〈あぶりか〉	江戸末期	88
亞弗利加	文化・文政頃	62

＊書名は付録の記号欄をご参照下さい。


アフリカ
中国
日本
阿利未加州
利未亞
阿未利加洲
阿非里
亞非利加
阿非里加洲
阿非利加
阿非里嘎
阿非裏加
亞斐理駕
阿斐利加
阿斐喇加
阿斐理加
亞非喇加
阿斐利駕
阿洲
斐洲
非洲
利未亞
未亞
リミヤ
亞弗理加
亞払利加
あひりか
亞弗利加
亞弗利迦
弗
アフリカ
亞弗里加
亞非利加
阿非利加
亞非理加
あぷりか
阿非理加
阿弗利加
亞佛利加
あびりか
亞布利迦
亞布利加洲
阿
亞夫利加洲
あふりか
(年) 1600
1650
1700
1750
1800
1850
1900
1950

付録：調査に用いた資料

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
一	利瑪竇坤輿萬國全図	利瑪竇	1602	株式会社大安
六十三	三才図会	王圻・王思義	1609頃	
八	職方外紀	艾儒略	1623	廣文書局
42	万国総図・世界人形図		1652	「日本古地図大成」(講談社)
二十三	坤輿図説	南懐仁	1672	台湾商務印書館
SU	大大節用新益大成		1704以後	米谷隆史氏
イ	西洋紀聞	新井白石	1708	岩波「日本思想大系」35新井白石
カ	増補華夷通商考	西川如見	1709	岩波文庫
ア	采覧異言	新井白石	1713	「新井白石全集」第四
ス	倭漢三才図会	寺島良安	1713	日本随筆大成刊行会
ga	四十二國人物図説	崎港西川先生著	1720	渕梅軒蔵板・「紅毛雑話」
五十一	欽定古今図書集成		1725	中華書局影印
108	中華古今分国大成図	西田栄欣	1728	「日本古地図大成」
109	万国図	本屋彦右衛門	1744	「日本古地図大成」
bi	解体新書	杉田玄白	1774	岩波「日本思想大系」65
52	フィッセル改定ブラウ世界図古写		1775頃	「日本古地図大成」
48	地球一覧図	三橋釣客(中根玄覧)	1783	「日本古地図大成」
9	改正地球万国全図	長久保赤水	1785頃	「日本の古地図」(南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編　創元社1970年)
49	地球万国山海輿地全図説	長久保赤水	1788	「日本古地図大成」
112	唐土歴代州郡沿革地図	長久保赤水	1789	「日本古地図大成」
gi	萬国新話	桂川甫周	1789	「紅毛雑話」
11	地球図	司馬江漢	1792	「日本の古地図」
57	「北槎聞略」付録地球全図	桂川甫周	1794	「日本古地図大成」
58	「北槎聞略」付録亜細亜全図	桂川甫周	1794	「日本古地図大成」
59	嗚蘭新訳地球全図	橋本宗吉	1796	「日本古地図大成」

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
53	地球図	林子平	1797	「日本古地図大成」
RA	異人恐怖伝	極西検夫爾著・志筑忠雄識	1801	「文明源流叢書」第三巻
50	坤輿全図	稲垣子	1802	「日本古地図大成」
60	円球万国地海全図	石塚崔高	1802	「日本古地図大成」
ヒ	訂正増訳采覧異言	山村才助	1802	青史社
YI	暦象新書	英人奇児/志筑忠雄	1802	「文明源流叢書」二
16	華夷一覧図	山村昌永	1806	「鎖国時代日本人の海外知識」（開国百年記念文化事業会）
14	新訂万国全図	高橋景保	1810	「日本の古地図」
MI	日本節用万歳蔵	勝村常善	1811再刻	米谷隆史氏
51	万国全図（「万国地理図説」付図）	高木正朝写	1822	「日本古地図大成」
105	閻浮提図附日宮図	存統	1829頃	「日本古地図大成」
82	地球万国全図	松本儀平	1836	「日本古地図大成」
RI	窮理通	帆足萬里	1836（序）	「日本科学古典全書」一
pu	舌話或問	渡辺崋山	1838	岩波「日本思想大系」55
pe	戊戌夢物語	高野長英	1838	岩波「日本思想大系」55
五十二	四洲志	林則徐	1839	「小方壺齋輿地叢鈔補編再補編」（1877年序・王錫棋輯）広文出版社
MA	外国事情書	渡辺崋山	1839	岩波「日本思想大系」55
YA	再稿西洋事情書	渡辺崋山	1839	岩波「日本思想大系」55
po	海防に関する蕃主宛上書	佐久間象山	1842	岩波「日本思想大系」55
107	南閻浮洲細見図説	恵厳	1845	「日本古地図大成」
66	新製輿地全図	箕作省吾	1847	「日本古地図大成」
85	万国山海輿地全図	赤水周泉	1847	「日本古地図大成」
二十六	海國図誌	魏源	1847	成文出版社（六十巻本）
十	瀛環志略	徐継畬	1848	台湾商務印書館
zu	大成無双節用集	鶴峯戊申世霊編輯 暁鐘成補	1849	米谷隆史氏
NU	海外新話	楓江釣人	1849	阪大
118	永代節用無尽蔵世界萬國之図	河辺桑揚	1849再刻	米谷隆史氏
87	地球万国山海輿地全図説	山崎美成	1850	「日本古地図大成」

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
84	万国地球全図	栗原信	1850頃	「日本古地図大成」
ZA	萬代早引節用集	宮田彦左衛門	1850新刻	江戸書林/大坂書林・米谷隆史氏
68	「八紘通誌」所載新摸欧邏巴図	箕作阮甫	1851	「日本古地図大成」
70	校訂輿地方円図	鱸重時	1851	「日本古地図大成」
69	地球儀	鱸重時	1852	「日本古地図大成」
71	新訂坤輿略全図		1852	「日本古地図大成」
72	新訂地球万国方図	中島	1852	「日本古地図大成」
bu	理学提要	広瀬元恭訳	1852	朝日新聞社「日本科学古典全書」
フ	海外人物輯	素行学人黒田惟孝撰并書・永田南渓識	1854	「紅毛雑話」
へ	外蕃容貌図画		1854	東春堂老人蔵版「紅毛雑話」
五十三	地理全志	英國慕維廉著	1854	「小方壺齋輿地叢鈔補編再補編」
WA	泰西七金訳説	馬場貞由訳述	1854	「江戸科学古典叢書」7
75	重訂万国全図	山路諧孝	1855	「日本古地図大成」
bo	倭蘭年表	和蘭オットモンエセ著・魁山無懐子訳	1855	國書刊行会「文明源流叢書」
五十四	地球説略	美國裨理哲著	1856	「小方壺齋輿地叢鈔補編再補編」
96	万国地球全図	近藤峴山	1856	「日本古地図大成」
サ	万国一覧	一番齋	1857	「日本古地図大成」
76	輿地航海図	武田簡吾	1858	「日本古地図大成」
pa	航米日録		1860	國書刊行会「文明源流叢書」
chi	万延元年遣米使節航米記	木村鉄太	1860	青史社
KU	瀛環志略（対嵋閣蔵・文久辛酉新刊）	徐継畬著・井上春洋・森萩園・三守柳圃訓点	1861	対嵋閣蔵・阪大
che	大福節用無尽蔵		1863	米谷隆史氏
124	江戸大節用海大蔵	高井蘭山	1863	米谷隆史氏
二十七	萬國公法	丁韙良	1864	京都崇実館存板
119	大日本新撰永代節用無尽蔵輿地全図	河邊桑揚子	1864四刻	阪大国文研究室
83	「西洋旅案内」所載世界図	福沢諭吉	1867	「日本古地図大成」
95	万国渡海双六	不及斎	1868	「日本古地図大成」

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
ウ	童蒙楷梯西洋往来		1868	教科書大系
pyu	東京地学往来全	松園先生編述	1868	青山堂発・阪大国文研究室
A	横浜新報もしほ草		1868～	「横浜新報もしほ草・江湖新聞」(小林秀雄校訂・明治文化研究会発行・1926年）に収
タ	世界國尽	福沢諭吉	1869	教科書大系
チ	輿地誌略	内田正雄	1870	教科書大系
チ五	輿地誌略巻五	内田正雄	1870	前田富祺氏蔵
tya	銅版画入萬國往来完		1871	阪大国文研究室
ク	世界風俗往来	中金正衡著	1872	井上氏等蔵板・教科書大系
コ	世界都路	仮名垣魯文著	1872	萬笈閣板・教科書大系
tyu	萬國新商売往来全	浪華翠栄堂半山編	1872	阪大国文研究室
オ	萬國地名往来	黒田行元著	1873	石田忠兵衛板・教科書大系
キ	世界婦女往来	山本輿助著	1873	大野木市兵衛板・教科書大系
pyo	頭書小傳西洋開化往来全	片山勤識	1873	阪大国文研究室
テ	萬國地誌略	文部省・小沢圭三郎	1874	教科書大系
ナ	地球儀用法	久保譲次訳著	1874	教科書大系
ba	単語獨稽古	伴源平編輯	1874	官許・書林商社・米谷隆史氏
hyo	増補仮名附単語篇下	東京伊藤桂洲輯録	1874	天香書屋蔵版・文江堂吉田屋文三郎発丁売・前田富祺氏
NI	開明節用集	山本輿助	1874	米谷隆史氏
ツ	地理初歩	文部省	1875	教科書大系
ZI	開化節用集	宇喜田小十郎	1875	前田富祺氏
NA	英主比較論	西周	1875以降	大久保利謙編「西周全集」第二巻・宗高書房
ヌ	小学地球儀問答	庄野欽平	1876	教科書大系
ネ	地理描図法	文部省・石橋好一訳	1876	教科書大系
KA二	米欧回覧実記	久米邦武編	1876	岩波文庫
TI	大全漢字彙	青木輔清纂	1876（増訂補刻）	明盟舎蔵・米谷隆史氏
五十	奉使倫敦記	庶昌著	1876以後	「小方壺齋輿地叢鈔補編再補編」
8	師範学校編輯萬國地誌略	文部省・小澤圭二郎識	1878	阪大

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
り	欧州奇事花柳春話	丹羽純一郎訳	1878	明治文学全集
二十九	環遊地球新録	李圭	1878（李鴻章序）	走向世界叢書
gu	翻刻萬國通史上編巻之上	作楽戸痴鴎訳編・平田宗敬校・文部省	1878刊	前田富祺氏
エ	世界国つくし	岡田伴治編	1879	博真堂板・教科書大系
ト	小学地誌	文部省・南摩綱紀	1880	教科書大系
myo	雅俗広義明治節用字典	小笠原美治編纂	1882	米谷隆史氏
syu	百科全書		1884	文部省・丸善商社出版
7	環遊日記	黒田清隆識	1887	
ホ	改正パーレー氏萬國史直訳（Peter Parley's Universal History.）	実学会英学校校閲・牛山良助直訳	1887	東京成文堂出版・前田富祺氏
せ	無味気	嵯峨の屋おむろ	1887	明治文学全集
二十八	漫遊随録	王韜	1887	走向世界叢書
四十三	俄遊日記	江陰繆祐孫著	1887	「小方壺齋輿地叢鈔」（1877年序・王錫棋輯）に収・広文出版社
rya	正宝普通伊呂波字引大全	京都山田浅治郎	1888	米谷隆史氏
HI	萬國史要（訂正三版）	斯因頓著・松島剛訳	1888	春陽堂印行・前田富祺氏
ryu	広益節用集	秋田管城編	1890	米谷隆史氏
四十八	天外帰槎録	潘飛声著	1890	「小方壺齋輿地叢鈔補編再補編」
SI	実地応用帝國新用文大成	福井淳編述	1890	前田富祺氏
三十	初使泰西記	志剛	1890（序）	走向世界叢書
ryo	天下一品明治用文全	藤谷暢吾編	1896	前田富祺氏
mu	勇少年冒険譚初航海	桜井鷗村	1899	明治文学全集
二十四	萬國通史前編	廣学会編	1900	台聯國風出版社
三十一	萬國通史続編	廣学会編	1900	台聯國風出版社
三十二	萬國通史三編	廣学会編	1900	台聯國風出版社
二十	原富下冊	厳復	1902	商務印書館

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
二十二	原富	厳復	1902	商務印書館
レ	椿姫	長田秋涛訳	1903	明治文学全集
十五	社会通詮	厳復	1904	商務印書館
三十三	欧州十一国遊記二種	康有為	1904（序）	走向世界叢書
myu	広益節用（上）（下）	大塚子成編纂	1908	米谷隆史氏
二十一	孟徳斯鳩法意	厳復	1909	商務印書館
kyo	新撰和獨字彙（大増補第十九版）	平塚定二等合著・山脇玄校閲・パウル・エーマン補正	1909（十九版発行）	米谷隆史氏
ま	時務一家言	徳富蘇峰	1913	明治文学全集
123	時事新報欧洲戦局地図		1914	時事新報社・阪大
122	列強大戦争地図		1914	大阪毎日新聞社・阪大
3	大阪毎日新聞社改造世界地図	山崎直方監修	1919	大阪毎日新聞社・阪大
4	大阪朝日新聞社調査部編纂世界新地図		1919	大阪朝日新聞社・阪大
nyo	言泉		1921	大倉書店
6	袖珍改新世界詳図	小川琢治編	1922	東京富山房発兌・阪大
七十	清史稿	趙爾巽	1927	香港文学研究社出版
ハ	世界地理重要問題解説	奥田保治	1928	中興館発行
nyu	日本家庭大百科事彙		1828	富山房
hyu	大百科事典		1932	平凡社
syo	國民百科大辞典		1934	富山房
nya	大辞典		1934	平凡社
六十八	海録注	馮承鈞注釈	1937	台湾商務印書館
九	外國地名訳名	中華民國教育部公布・國立編訳館編訂	1955	台湾商務印書館
zya	世界大百科事典		1955	平凡社
zyu	玉川百科大辞典		1961	玉川
KI	広辞苑	新村出	1969	岩波
hya	世界大百科事典		1972	平凡社
二十五	外国地名訳名手冊	中国地名委員会編	1983	商務印書館

記号	書　名	作　者	年代	出版社・所蔵
zyo	大百科事典		1984	平凡社
31	世界図		江戸初期	「日本古地図大成」
81	世界六大洲		江戸末期	「日本古地図大成」
86	地球万国全図・大日本略図		江戸末期	「日本古地図大成」
88	地球万国全図説覧	小松公峯	江戸末期	「日本古地図大成」
89	蒙古退治万国早分図		江戸末期	「日本古地図大成」
90	万国人物之図	栄寿堂刊	江戸末期	「日本古地図大成」
91	地球万国全図	嶺田楓江	江戸末期	「日本古地図大成」
92	早智万国之図	群芳堂刊	江戸末期	「日本古地図大成」
93	万国人物図絵		江戸末期	「日本古地図大成」
62	万国輿地全図	松原右仲	文化・文政頃	「日本古地図大成」
R	官板バタヒヤ新聞		幕末明治	「幕末明治新聞全集」（世界文庫）に収
C	時事		明治	「新聞集成明治編年史」（中山泰昌代表）に収
E	郵便報知		明治	「新聞集成明治編年史」
F	朝野		明治	「新聞集成明治編年史」
G	官報		明治	「新聞集成明治編年史」
I	東京日日		明治	「新聞集成明治編年史」
D	国民		明治	「新聞集成明治編年史」